

台湾の日本語ディベート事情

台湾・国立交通大学 上條純恵

台湾における日本語ディベートの歴史

台湾では日本語教育が盛んで、2009年度の調査報告によると、日本語学習者は約24万人で、韓国、中国、インドネシア、オーストラリアに次いで5番目に多い。また、175ある高等教育機関のうち165機関で日本語教育が行われており、そのうち日本語関連の学科を設置しているのは48機関である。このようなことから、日本語学習者の層が厚いことが分かる。

日本語ディベートは大学の日本語学科の一部の教員が教室活動の一つとして取り入れていたが、あまり知られることはなく、ディベート自体、認知度が低かった。そのような中で、2004年4月にそれまで教室活動でディベートを取り入れていた学校に呼びかけ、有志による交流会を行った。この時に、広く日本語教育関係者にも見学のアナウンスをし、意見交換会を行った。その後、ディベートに興味をもった教員たちによって年に一度、全国大会が開かれるようになった。その際、ルールやフォーマットを統一する必要があったので、「全国教室ディベート連盟」のサイトに掲載されているルール、フォーマットを参考にさせていただいた。

大会が開催され回を重ねるごとに、日本語ディベートに興味を持つ教員や、ディベートの知識を持つ教員が増え、「会話クラスにディベートを取り入れる」「作文クラスにディベート的な発想を取り入れる」などの取り組みが、少しずつ見られ、台湾の日本語教育の現場に「ディベート」が根付き始めていた。このルールを使って行われている取り組みとしては、台北にある東呉大学では学年別

に論題を出し「日本語ディベートクラスマッチ」を、高雄にある文藻外語学院では近隣の大学を中心に「文藻杯」として、日本語ディベート大会を開催している。

このような中で世界に先駆けて行われていた「外国人による日本語ディベートの全国大会」は、2010年5月に東呉大学で行われたのが最後になってしまった。継続できなかった理由としては、運営が有志による日本語教師という後ろ盾のない脆弱な団体であり、会場校は、会場提供の他、運営、経費の事務的作業も強いられ、負担が大きかったことが挙げられる。また、指導にも時間がかかり、学生、担当教員の負担が大きいことや、学校の名前を背負っているプレッシャーから出場を敬遠する学校もあった。また、ディベート教育の理解を得られず、間違った理解から、日本語教育に寄与しているのか、という疑問の声もあり、突然幕を引く結果となった。

個々の教師が授業の中で行ってきた日本語ディベートが、大会を開催することで、広く認知されるようになり、ディベート指導をする教師やディベートを経験する学生が増えつつあったことは確かである。これは、台湾の大学における日本語教育の新たな展開であり、台湾における日本語教育のレベルの高さを世界に示すものであった。その大会がなくなってしまったことは非常に残念なことであった。

2011年全国日本語ディベート選手権

そこで、小規模ではあるが、再度「2011年全国日本語ディベート選手権」が5月に当校で開催され、

「台湾は高校の制服を廃止し、私服着用とするべきである」という論題で6校の大学生たちが熱い議論を戦わせた。

今回参加した学生からは、「日本語の聴解能力が伸びた」「日本語を話す機会が増えた」「日本語サイトをたくさん見て、読む勉強になった」という日本語そのものの能力の他に「瞬時に反駁する練習経験が、思考するトレーニングになった」「メモを取る能力がついた」「資料のいろいろな見方を学んだ」「レポートを書くときにはディベートで訓練したことが役に立っている」「将来、ディベートの経験はもっと生かせるだろう」という感想を寄せている。また、チームで取り組んだことによって「チームワークの大切さ」に気付いた等、実り多かったことを実感しているようだ。

以上のような学生たちの肯定的な意見・感想は私たち関係者には励みであり、自信を持って日本語ディベートを薦められる原動力になっている。しかしながら、先にも挙げたように、運営母体がない脆弱な有志の集まりであるという問題は解決されていない。

今後の展望

今後、大会を継続しながら、「ディベート教育の意義を広めること」「ディベートの指導者を増やすこと」「日本語学習者がディベートに取り組みやすいようにすること」など、教育現場のインフラを整えることが課題である。運営面では、これまでのような有志で行うには限界があり、形態そのものを見直す等、様々な面で課題が山積みである。このように「台湾の日本語ディベート」を取り巻く環境は、一部の教員は教育効果を感じつつも、普及していると言えないというのが現状である。

今回、このような形で「台湾の日本語ディベート事情」を日本のディベート関係者にお伝えできる機会を得たことは私たち関係者にとって光栄であ

る。また、新しい大会開催にあたり、瀧本哲史先生には二度も台湾に来ていただき、論題提供から大会審判まで大きな支援を賜ったことはとても心強いものになった。

韓国では来年、台湾での大会をモデルにした「日本語ディベート大会」開催に向けて準備中である旨、関係者の方から連絡をいただいた。このように私たちの活動が、韓国に広がったことは大きな喜びである。いつの日か「日本語ディベート国際大会」実現という夢を抱きつつ、情報交換しているところである。